

新井将敬と中野正剛

—二人の政治家の死—

今井久夫

目次

- 一 はじめに
- 二 死の美学
- 三 新井の悲劇
- 四 中野の不幸
- 五 中野の反撃
- 六 中野の孤立
- 七 三者同盟解消
- 八 中野の最後
- 九 おわりに

一 はじめに

自民党の新井将敬が平成十年二月十九日、東京品川高輪のホテルパシフィック・メリディアンの上三階二三八号室で自殺した。泥酔状態の下での縊死であった。日興証券にたいする利益要求事件にかかわる証券取引法違反（利益追加の要求）容疑の逮捕許諾請求が衆院に提出され、同日の本会議で全会一致承認される予定になっていたその直前のことであった。

高輪署の調べによると、室内の天井にある空調の通風口に浴衣の腰ひもをかけ、それに自から首を吊っていた。ワイシャツにズボン姿だった。部屋に備えつけのレター用紙に書かれた遺書二通、妻眞理子宛と同僚議員亀井静香宛のものがそれぞれ残されていた。足元には空になったミニバー用の小型洋酒瓶がいくつかあった。

昭和十八年十月二十七日未明、東京都渋谷区代々木本町の自宅で衆議院議員中野正剛が割腹自殺した。割腹といっても形式的で、左頸動脈を切って死に至っている。「刀の切先が丸くて切れそうもない。時計の側でネタ刃を合わせたが駄目、そこで腹の方は軽くまねかたにして仕損じぬようにやる。東向九拜。平静にして余裕綽々、自笑、俺は日本を見乍ら成仏する。悲しんで下さるな。議員辞任の手續頼む。多くの先輩同志に感謝す」との遺書を子息泰雄に残していた。

二 死の美学

昭和と平成、戦前と戦後の差はあるが二人の政治家が自らの命を絶った。新井は証券取引法違反容疑で東京地検特捜部の逮捕許諾請求が衆院に提出されていた。中野は陸軍刑法及び海軍刑法の造言蜚語の疑いにより東京憲兵隊に身柄を拘留されていたが、たまたま帝国議会召集のためその日釈放されたばかりであった。

ともに追いつめられていたことには変りない。新井の場合には逮捕前である。逮捕されても裁判で判決がでるまでは無罪の立場にある。なぜ死を急いだか、疑問は残る。同僚議員や友人知己、識者の中にも「法廷で堂々と身の潔白を主張すべきだった」との意見が強かった。新井本人も記者会見で、あるいは

国会の証人席で身に覚えのないことを主張してやまなかった。それなのに何故、この謎はまだ解けない。

中野の場合は破廉恥罪ではない。顧みて一片の悔いもない国事犯だ。むしろ胸を張って日頃の反東条内閣打倒に挺進してこそ中野本来の面目がある。その中野が死を選んだ。これも分らない。

しかし新井と中野の間にたったひとつだけの共通点がある。それは二人ともだれからも声をかけられずに、たったひとりで死んでいったということだ。その意味では孤独地獄そのものだったに違いない。

それからもうひとつ、ともに死に臨んで「死の美学」を最大限に演出したことだ。新井の泥酔状態での縊死はおよそ美的感覚にほど遠い。しかしこれは新井の本意ではない。新井はむしろ古式にのっとっての切腹を望んでいたようだ。その証拠には新井は部屋に日本刀を持ちこんでいる。

しかし、昔の武士ならいざ知らず、現代人のひとりである新井は腹一文字にかき切って死ぬ自信はなかったと見える。やはりもうひとり介錯役が必要だ。新井が常に尊敬していた三島由紀夫でさえ切腹だけでは死に切れなかった。

新井の死に至る理由のひとつに在日韓国人の被害者意識がある。新井が正式に帰化したのは高校生の時だった。以来新井は日本人以上に日本人らしく生きてきた。三島に傾倒するのもその現われだ。

しかし、旧東京二区からの初陣に敗れたのも政敵石原慎太郎によって貼られた「帰化人」のレッテルによるところが大きい。日興証券にたいする利益要求が表沙汰になってからの検察のすさまじいばかりの苛鋭追求振り連日のマスコミの過大報道は、新井にとっては在日韓国人であったがゆえの差別からくる異常な差別待遇以外のなにもでもなかった。また野党はさて措くとしても、同じ自民党議員のよそよそしさ、さらにはその離党勧告の動きには耐えられないものがあつた。

先頭に立ってかばってくれなければならないのは加藤幹事長から三下り半をつきつけられる。そのうしろには「早くしろ」といわんばかりの橋本首相の姿さえチラチラしている。だれにすがればいいのか、だれを頼りにすることもできず孤立化していくばかりだった。亀井に遺書を残したが、その亀井とのつき合いもここ一年ほどのものでしかない。

新井の死は一種の憤死だ。いや怨死かも知れない。新井の死の一報を聞いて加藤幹事長の顔色が変わった。たしかに寝覚めがわるいだろう。しかしこの寝覚めのわるさは、多少の別はあっても自民党のだれもが心の隅に共有している。

しかし新井にも責任はある。新井はいい子になりすぎた。自分がいい子になるために他の人をわるものにした。それがわが身にハネ返ってきたともいえる。

三 新井の悲劇

新井は頭脳明晰だ。東大経済学部を卒業して新日本製鉄に入り、大蔵省に転じる。渡辺美智雄蔵相の秘書官をつとめるが、おおいにその見識と手腕を買われ、自民党から政界に出る。初戦にこそつまづいたが以後トントン調子だ。当選四回、自民党の外交、財政、商工、通信、科学技術の各副部会長を歴任し、衆院の消費者問題特別委員会の委員長をつとめた。押しも押されぬ若手中堅組だ。そろそろ大臣の適齢期に入っている。

このように党歴は多彩だ。しかし渡辺の胆入りで、おんぶにだっこで当選したものの、その渡辺派のみならず自民党が気に入らず飛び出して、自由、新進、二一世紀、無所属と渡り歩き、尾羽打ち枯らし

て舞い戻ってきた。さすがに渡辺派は「この恩知らず」とばかり門前払いをくらわせたが、三塚派が引き取った。以来帰り新参の身だ。しかし出もどりだからといっていつも小さくなっているような新井ではない。あちこちに顔を出してブチまくる。新井のセールスポイントは「革新の旗手」だ。

革新の旗手はわるくない。しかし革新の旗手を賣りこむために他人のわる口をいう。これがよくない。人を叩き、人を罵り、そしてわれのみ正しいと涼しい顔をしている。新井にやつつけられる側こそいい迷惑だ。新井のために傷ついた友人同志も少くない。かつての仲間が離れていく。離れていくばかりではなく反新井にまわる。結局この攻撃タイプの性格が作らなくてもいい敵を作った。

総じて攻撃タイプは攻撃している時は強い。さっそうとしている。しかしひとたび守りにつくとガタガタだ。新井に政治改革を主張し、政治倫理を説かせれば、舌鋒鋭く、理路整然として向うところ敵なしだ。その正義の味方月光仮面さながらの新井が証券会社から不正のカネを受け取っていた。こうなると弱い。タジタジとなる。

しかし新井は負けず嫌いだ。立場が不利になればなるほどそっくり返り、突張る。その強がりの極限で背骨がポッキリ折れた。そんな感じだった。新井から後事を託された亀井はそんな新井を「あわれ」という。可哀そうという意味だろう。しかし亀井は新井にたいする弔辞の中で「敷島の大和心と人となれば朝日に匂う山桜花」との本居宜長の歌を手向けている。

四 中野の不幸

敵を作ることでは中野も人後に落ちない。中野には多数の味方がいた。頭山満、鳩山一郎、三木武吉、

緒方竹虎など一騎当千の頼もしい親衛隊に囲まれていた。しかし、中野の敵は時の宰相東条英機だ。そのうしろには臨時軍事費を握る陸軍が控えている。中野親衛隊といえども歯が立たない。

しかし、相手が強大な陸軍であっても、当時の帝国議会が火の玉になって体当たりすれば勝負は分らない。落ち目になっていたとはいえ、議会は議会だ。陸軍の臨時軍事費を通すも通さぬもその権限は議会にある。言論はサーベルより強しだ。

中野はその議会をバックに東条に一戦を試み、一時は土俵ぎわまで追つめながら、結果として負ける。それは味方を敵にしまったからだ。中野もまた当時の月光仮面だった。われのみ正しく、われに反対するものはすべて邪だ。この中野の正義感、使命感が逆に中野の足を引っばる。

昭和十八年といえば政党はすべて自己解散していた。政友会もなければ民政党もない。翼賛政治会に統一されていた。一国一党の時代だった。

しかし戦局が次第に悪化するに従って、一国一党にもゆらぎが出てくる。東条のリーダーシップにたいし批判が出はじめる。この動き未然に封じるために政府は戦時刑事特別法改正案を議会に提出した。「時局益々重大ノ折カラ一層治安ノ確保ニ努メ以ッテ一億一心ノ挙国一致ノ態勢ヲ堅持スルノ要洵ニ緊切ナルモノガアリマス。此ノ際、国政ヲ変乱スル目的ヲ以ッテ為サル所為ニシテ、挙国一致体制ニ重大ナ影響ヲ及ボス虞アルモノニ付テハ、極力之ヲ防過スルコトガ緊急ノ要務デアリマス」と岩村通世司法相の提案理由にある。

この改正法案は結果としては政府原案通り無修正で可決成立するが、審議の課程で大きな波乱があった。改正案審議のため二十三名の委員からなる特別委員会が設置されたが、激しい論戦の末、委員の多

数が辞任するというさわぎを起した。また翼政会代議会が同案反対のため紛糾し収拾つかなくなるなど戦時議会にあるまじきハプニングが起きた。

東条としてはこの改正案で政府批判を押え、いわばこの防弾チョッキで身を固め、きびしい世論の火の粉の中をむりやり中央突破しようとしたが、意外に手ごわい反撃に遭った。東条の心胆を十分寒からしめるに足りる出来ごとであった。

しかしこの時の主役は中野ではない。特別委では同志の三田村武夫や、一年生ではあったが弁護士江口繁、相沢事件で特別弁護を買って出たため陸軍中佐の身分を棒に振った満井佐吉などが大いにあばれた。また三木武吉が翼政代議会が混乱したあと有志代議士会の座長となり、翼政会幹部を手玉に取ったのも当時の語り草となった。

五 中野の反撃

中野は帷幄にあって三田村らに作戦をさずけることはあっても表舞台には出なかった。出るのはこのあとの企業整備要綱と食料増産応急対策要綱をめぐる法律案と予算案審議の時だ。この時、中野は陣頭に立った。必死の形相ものすごく、火を吐くような言論を展開し、東条に協力する翼政会首脳を完膚なきまでに粉砕した。中野の一方的な勝利だ。しかしこの勝利のために命を失う。

政府は企業整備と食料増産のため昭和十八年六月臨時議会を召集する。しかし会期はたった三日間だ。祖父伝来の家業を捨て軍需工場に駆り出されるといふ国民生活の死活にかかわる問題を三日で片づけようとするのだ。

中野と鳩山と三木の三人が立ち上った。中野、鳩山、三木の「三者同盟」がそれだ。鳩山は翼政会の代議会に出たことがない。出たのはあとにも先きにもこの六月十七日の代議会ただ一回きりだ。発言したのもこれが最初で最後であった。

翼政会幹部の議案説明が終ると、鳩山は手を上げて壇上に立ち、おもむろに切り出した。当時その代議士会に出席し、つぶさに発言を聞いた中谷武世は次のように記している。

「この議会で食糧増産と企業整備の両案が審議されるが、ともに国民生活に直接重大な関係を持ち、かつ戦争遂行の上からも重要きわまりない。よって十分に慎重審議して国民によく理解せしめ、政府をして実施にあやまちなからしめることが、われわれ議会議政治家の任務である。常に命令服従の関係で国民を引っ張るのではなく、十分納得させた上で協力を求めることが肝要だ。しかるに会期は僅か三日間、衆院における審議は実質的には一日にすぎない。これでは審議は形式だけだ。国民からすればいいよ窮迫してきた食糧はどうなるのか、企業整備で仕事はどうなるのか、心配するのは当然だ。政府の説明では戦争中だから早く審議して成立させるべきだというが、私は戦争遂行に直接関連し、しかも国民生活に重大な関係のある問題だけに、慎重な態度で十分な審議をする必要があるといいたい。日清日露の戦争の際もしばしば臨時議会が開かれたが、会期を延長して審議を慎重にしたものだ。戦争も命令服従によって遂行するのと、国民の納得によって遂行するのと雲泥の差がある。以上の理由から幹部諸君に要望したいのは政府でよく懇談して、場合によっては政府の反省を促し、会期を延してこの重要案件の審議を尽くすよう努力してほしい。これが議会としての当然の任務であり国民にたいするわれわれの責任だ」と結び降壇した。中谷によればその態度といい論旨といいさすがに堂々たるもので満場水を打っ

たように寂として声なく、全員等しくこれを傾聴したという。この頃の鳩山は自由主義者のらく印を印され、いわば議会の鼻つまみ者だった。その鳩山の発言をみんな頭を垂れて聞いたのだ。余程の名調子だったに違いない。

しかし政調会長の小川郷太郎が役員席から立ち上って「鳩山君の発言はもっともだが、最近の議会運営では新しい方式によって議案の事前審査を行っているから心配無用だ。党としては会期延長について政府と話し合う考えはない」と突っぱねた。

六 中野の孤立

これを聞いて中野が憤然として壇上に登る。中野は足が不自由だ。しかし全身に怒りが湧れている。中谷の耳底にはこの時の中野の最初の切り出しから、気魄に満ちた言々句々のすべてがありありとこびりついている。「前回の議会においてガダルカナルから撤退転進の報を聞き、今議会ではアッツ島玉砕の悲報に接す。およそ鋼鉄と鋼鉄と相打ち相触れる時、脆いものが破れるのは自然の理である。前線将兵の勇戦奮闘にかかわらず戦局我に利なきは何故であるか。それは銃後の国民組織に欠陥があり、わが政治のあり方が当を得ていないからだ」と前置きし、鳩山発言を支持して「今議会に国民生活に重大の關係ある二法案が上程されたが、三日間の会期、実質一日の審議期間とは何ごとであるか。加うるに議会の長老鳩山君の謙虚にして傾聴すべき只今の発言にたいし、小川君の答弁は無礼である。翼政会の幹部諸君が小川君によって示されたような態度で今日の政局を考え、議会を運営しているところに根本的な問題がある。政府の要求通り議会を運営するならば議会は有名無実となる。しかも現在日本の議会には

政党として翼政会ただひとつあるのみだ。その唯一の翼政会が幹部の専断により政府の意のままに動くとしたら、東条内閣は完全なる独裁政府となるのではないか。およそ権力の周囲に阿諛迎合の茶坊主ばかり集っていると、善意の指導者として不逞の臣たらしめ、ついには国を亡すにいたる。日本を誤るものは政界の茶坊主どもだ」

と励声一番演説を終えた。鳩山の聲はいわゆる呂音で莊重な響きを持っている。それが一語一語、じゅんじゅんと説いてやまない。論旨明快の上にメリハリがきいている。敵も味方も感動したわけだ。中野の演説は現代型で、言葉がポキポキと短く、短刀で肺腑を突くような効果がある。普通の会話でもまるでケンカ腰の口調のように聞こえるが、この時は翼政会の代議士を「茶坊主」呼ばわりした。出席者一同カンカンだ。演説途中から怒声飛び野次が飛び収拾つかなかった。

この時、三木武吉が仁王立になり、中野の言葉そのままに「茶坊主ども黙れ」と大音聲で一喝した。とくに血相を変え腕を振り上げて中野に肉迫しようとしている中村梅吉にたいしては「梅吉やめろ」と名指しで叱り飛ばした。三木といえば野次將軍の異名がある。その野次將軍がまるで鬼神の如く荒れ狂っている。三木の目は三白眼だ。その三白眼でハッタと睨まれると身の縮む思いがする。中村が毒気を抜かれたようにおとなしくなり、ざわめき立っていた幹部席も鳴りを静めるに至った。

三木の突嗟の援護射撃のお陰でこの場はおさまった。中野も無事退席することができた。しかし、戦時議会史の一ページを飾るに足りる中野の武勇伝は、中野自身に深い傷を与えた。この一部始終の報告を受けた東条は改めて中野を警戒する。中野追放を決意したのはこの時だろう。

七 三者同盟解消

また中野は多くの友人と支持者を失った。鳩山の発言に拍手した出席者は、中野の演説にも喝采を惜しまない同志だ。ところが中野はその同志を茶坊主扱いしてしまった。中野の方で顔を逆なでし、挑戦したのだ。中野の正義は中野ひとりの正義だった。自分だけが正しい。あとはみんなクズだ。この中野の自己心酔が折角の仲間を反対陣営に追いやってしまった。これが中野の悲劇につながる。

たとえば中村梅吉は心情的には中野と同じサイドに立っている。同じく中野に殺到しようとした津雲国利にしても武智勇記にしても、さらに松田竹千代にしても中野と同類項だ。その同類項がごとくアンチ中野にコリ固まってしまう。中野の不徳の至すところといわなければ何らない。

鳩山もはじめは気乗り薄だった。それが三木に口説かれて「三者同盟」に加わる。鳩山の性格からいえば中野のやり方は、ひとりよがりに見えたに違い、鳩山を立ててくれたが有難迷惑の気味があっただろう。鳩山はこれ以後、登院を断念する。軽井沢の山荘に籠り、イモ作りに励む。そしてじっと終戦を待つ。戦争に敗れてからの鳩山の水を得た魚のような活躍振りは人のよく知るところだ。この時中野はすでに亡い。

三木にしても同じだ。あの修羅場の翼政会代議士回以後、三木の姿は議会から消える。妻妾七人を引き連れて郷里の小豆島に引きこんでしまったのだ。終戦まで鳴かず飛ばずの生活だったが、戦後いち早く鳩山の下に馳せ参じ、戦後政治の主役のひとりに躍り出た経緯はこれまた政治史に詳しい。

かくて中野はただひとり取り残される。鳩山去り三木離れて以後の中野は孤独の戦いを展開する。そ

して東条の前に敗れ去るのだ。このあたりの中野の姿は後年の新井のそれとダブる。新井もまたたったひとりの戦争をつづけていた。中野の相手が東条なら新井の相手は検察だ。ともに権力であることに変わりはない。

新井にも味方はいなかった。いや、いたかも知れない。そのいたかも知れない味方もひとり去り、ふたり去り、新井だけになってしまった。正しいのは新井だけだ。新井は自分以外のだれにも攻撃を仕かける。一刀両断してはばからない。検察とマスコミの重囲の中で新井は返り血を浴びながら斬り死にする。かつての同志は知らん顔だ。だれも助けようとはしない。

新井と中野は生れも違えば育ちも異なる。時代も別だ。もちろん疎外され、排除されていく事情も同一ではない。しかしその戦闘的な性格は似ている。己を是とし他を責める傾向はそっくりだ。そこに共通の不幸があった。

中野と東条は水と油だ。はじめから異質同士で相なじむことはない。しかし、それが正面切って対立するようになったのは、やはり昭和十八年一月元旦の朝日新聞一面に掲載された中野の「戦時宰相論」だろう。東条はこれを読んで激怒した。

「戦時宰相たる第一の資格は、絶対に強きことにある。戦争は闘争の最も激烈にして大規模なるものである。闘争において弱きは罪悪である。国は経済により滅びず、敗戦によりてすら滅びず、指導者が自信を喪失し、国民が帰趨に迷うことによりて滅ぶのである」

これは東条弾劾ではない。東条激励だ。「首相よ強くなれ」と尻を叩いている。これでは怒る方がムリだ。しかし東条は怒った。仕掛けはこの次にある。中野は諸葛孔明の故事を引きつつ「彼が非常時宰相

たるの心得は出師の表に現れている。彼は虚名を求めず、英雄を気取らず、唯自己に就いては『先帝臣が謹慎たるを知る』と奏し、真に臣たる者の心だてを語っている。彼は謹慎である。それ故に私生活も清楚である」ここに到って東条の顔色が変わった。

八 中野の最後

昭和十八年を迎えて、戦局は緒戦ほどの勢いはなかったが、まだ余力を残していた。東条は依然として得意の絶頂にあった。その思い上っていた東条にとって中野の一文はまさに頂門の一針だった。謹慎ならざる東条だったからこそこたえたのだ。東条は自分で電話器を取り上げ朝日新聞の発禁を命じた。筆を封じられた中野は重臣工作を展開する。東条を倒して宇垣一成内閣を作り、戦争終結に当らせようとしたのだ。そのため近衛文麿、若槻礼次郎、岡田敬介、広田弘毅、米内光政の総理大臣経験者すなわち重臣に働きかける。

しかしこの時は重臣たちの弱腰のため、中野の努力も空しく、宇垣擁立は失敗する。ことは未遂に終わったとはいえ、中野の動きは憲兵隊にことごとくフォローされ、そのすべてが東条の耳に入っていた。それだけではない。中野はこの重臣工作を通じて重臣からの信用を失う。中野は本来議会制民主主義にはなじまない、多数決原理は衆愚政治と同義語だ。むしろヒトラー、ムッソリーニの独裁政治の方が話が早い。中野は率いる東方会の会員に黒い制服を着せ、ハーケンクロイツまがいの徽章をつけさせていたほどだ。

その中野から見れば重臣などはまだろっこい存在だ。その重臣を相手にしなければならないのは中野

の最も苦手とするところであったかも知れない。中野は煮え切らない近衛を「近衛公」とは呼ばず「近衛嬢」と呼んでいた。また島根出身の若槻にたいしてはその朝鮮半島がらみから「唐人国を誤る」と罵しり、二・二六事件でからくも危地を脱した岡田については炭小屋から逃げ出した吉良上野介扱いしてはばからなかった。これでは重臣から嫌われても仕方がない。

それにしても分らないことがひとつある。何故自決したか。これが分らない。子息の泰雄も首をかしげ、親友の緒方も疑問を呈する。泰雄は「謎は謎としておいた方がいい」と投げ、緒方は大川平八郎を引き合いに出しながら「東洋的諦観」説で無理やり納得している。

中野の罪状は「昭和十八年二月上旬自宅ニ於テ洲崎義郎及泉五郎兩名に対シ何等確實ナル根拠ナクシテ大東亜戦争ニ於ケル陸軍及海軍ノ作戦ニ不一致アリ、右不一致ノ為、ガダナルカナノ会戦ハ作戦ニ失敗シ其ノ為数万ノ犠牲者ヲ出シタルモノナル趣旨ノ言説ヲ為シ以テ陸軍及海軍ノ軍事ニ関シ造言蜚語ヲナシタルモノナリ」というものだ。中野はこれを否認しつつづける。しかし十月二十六日の午前六時から午後二時に至る東京憲兵隊長の四方諒二の取り調べで、その事実を認める。この間なにがあったのか。関係人物も死亡し、関係書類は焼失している。すべてはヤミの中だ。

中野にはいろいろな噂があった。不敬罪説、ドイツ大使館からカネを貰っていた話など、原田日記や細川日記にも出ている。憲兵隊でもおどかされたようだ。第二の大杉米になってもいいのかとか、応召中の子供の命を保証しないとか、一種の精神的拷問を受けた形跡がある。

中野はその性格からいって、絶対におどしには屈しない。おどされればおどされるほど逆に強くなる。死をものともしない。それが中野の真骨頂だ。その中野が憲兵隊ですべてを自白した。これは意外だっ

たに違いない。

中野の身柄は憲兵隊から検事局に移され、検事の中村登音夫が再度取調べるが、前回とガラリと様子が違って、被疑事実をすべて認める。「本人に接すると、いかにも淋し気で、戦いを投げたという感じを受けた」中村はそう語っている。

もし、中野が何かの理由で憲兵隊のおどしに屈したとするなら、それはやはり子供の命と引き代えであつたかも知れない。中野の子煩悩は有名だ。父性愛の権化そのものだった。その弱点を突かれた。そう考えるのが一番理に叶う。仏壇の中に隠されていた「護国、頭山先生」表記の遺書の中に「決意一瞬、言々無滞、欲得三日閑、陳述無茶、人ニ迷惑ナシ」の一片がある。

九 おわりに

中野の葬儀は同三十日青山斎場で行われた。葬儀委員長は緒方がつとめた。全国から集まった東方会会員は東京駅や上野駅で検束されたが、それでも斎場には一般国民二万人が参列した。東条は書記官長の星野直樹を通じて緒方に「供物を受けてもらえるか」と問い合わせてきた。「死んでしまえば恩讐共がない、厚意ある供物ならどなたのでも受けるが、あらかじめ受けるかどうか聞くなんで、おかしいじゃないか」これが緒方の返事だ。精一杯の皮肉といえよう。

新井の地元の池上本門寺で行われた葬式には一千人ほどの関係者が集まった。葬儀委員長には三塚博が予定されていたが体調不良のため辞退し、同派の宮下創平が代行した。喪服の人は少く、多くは背広かジャンパー姿だった。女性の参会者が多かったのも印象に残る。橋本も顔を出した。その供物を受け

たかどうかは聞きもらした。

(文中敬称略)

参考文献

- 戦時議会史(中谷武世)
- 父、中野正剛伝(中野泰雄)
- 中野正剛の悲劇(猪俣敬太郎)
- 人間中野正剛(緒方竹虎)
- 原田日記(原田熊男)
- 情報天皇に達せず(細川護貞)
- 緒方竹虎(緒方竹虎伝記刊行会)
- 評伝、緒方竹虎(三好 徹)
- 鳩山一郎回顧録(鳩山一郎)
- 三木武吉(御手洗辰雄)